

## 閉じた世界が開ける体験



津 守 真

その日は、私共にとっては、少しミゼラブルな状況からはじまった。秋のよく晴れた日であるが、四才の男児M<sup>\*</sup>は、登園したときから外に出たくて、門から体を半分出して、母親の足もとに坐っていた。

Mは、普段は、自分で何かを見つけて、比較的ひとりでよくあそぶ。けれども、人との結びつきは稀薄で、気分によっては外にとび出していっても不思議はないという危惧を感じさせるところがあった。こんな秋晴れの日

には、園内のどんな遊びも、外の魅力に勝てないかもしれない。

こんなとき、Mをひきとめようとして誰れかが近付いても、それは逆効果のはたらきになるように思えた。先生のひとりが、通りすがりに、ホールから積木を運んできた。私にささやいてくれた。おとな同志の好意的なヒントが、わきから光を投げかけてくれて、何と助けになることか。私は、Mは物を並べることが好きなのを思

い出した。箱積木を並べてその上を渡り歩くのは、Mがよくやっている活動のひとつである。

私は、ホールから庭を横切つて、門まで、箱積木をひとつづつ運んだ。Mは、それには無関心のように見え、私は何度もその間を往復し、無駄なことをしているのではないかと思ひながら、三十個ぐらいの積木を通路のように長く並べて置いた。私自身が、Mとは独立に、積木をつないで長くするという秩序をつくる活動を、いくらか無理をしながらも、自らを活気づけてやっていたことになる。

しばらくすると、Mよりも先に、何人かの子どもがその積木の上を歩いて渡りはじめた。そして、私が並べた積木の中から、長方形のものを選出して、面ごとに違う色が塗つてあるのだが、緑色の面を出すようにして、並べかえた。

やがて昼食のとき、天気が良いので、テーブルが庭に出た。Mは、さっと走って椅子をもつてきて、テーブルの前に坐つた。食事をしながらも、Mは積木の並べかえ

に従事した。そして、積木の通路の端には、タイヤを並べ、その上をいったり来たりした。数人の子どもも、一緒になつて、積木とタイヤの上を歩いた。

この日のみならず、日頃、Mは物を並べて、自分だけの秩序をつくり出すことを遊びとする。それが自分だけの閉じた世界のことになるので、他の子どもがそれをこわしたり、もよう替えをすると承知しない。この日も、一、二度そういうことがあると、Mは積木の上につ伏して横になり、顔を伏せる。表立った抗議はしない、ひそかな悲しみの表現である。私が傍にしばらく坐っていると、この日は、Mはじきに立ち上り、積木の上を渡りはじめた。私も他の子どもたちも、同じ積木の上を歩いた。すなわち、そのときには、Mの秩序の世界は、もはや完全に閉じた世界ではなく、他人によって共有されている。

私は、更に、物の秩序の世界に、水を持ちこむことに

よって、世界を開くことができないかと考えた。水は流出する物質である。如露に水をいれてMに渡すと、Mはそれを受取り、一定の場所に運んで水たまりをつくる。

それをくり返すうちに、私は、如露をMに手渡すときに、ゆっくりと渡し、ある瞬間は、Mと私とが両方の側から同じ如露を握っている状態になるようにした。このことは、バケツの柄を受け渡すときには、もつとうまくいった。手と手がバケツの柄の一方所で触れるときには、Mは私を見た。Mと私との間で、共存感をもつことができた初めての体験だった。

このころには、すでに、Mは洋服を脱いで、素裸になっていた。Mは、気を入れて遊ぼうとするときには、洋服を脱いでしまう。社会的観念の象徴である衣服を脱ぎ捨て、ひたすらに自分の遊びに力を注ぐ子どもの姿である。普通の子どもは、こういう場合にも、実際に服をぬぐことはしない。この子どもたちは、人間の素朴な姿を、そのままに見せてくれる。私は、この素直な気持を尊重したい。この時期を通り過ぎて、次には、子どもは

社会を自覚して自制するようになることを、いまは児童期にはいった、同様の行動をしていた何人もの子どもたちについて、私共は見ている。

午後になって、帰る頃には、庭いっぱい、とりどりの色の積木とタイヤが並び、何人もの子どもが如露とバケツを運んでできた水たまりから、側溝に水が流れていた。それは、子どもが存分に遊んだことをあらわす光景である。このひとつの光景を生み出すのには、ここに述べてきた一日の過程がある。保育の実際を知る人には、珍らしくない、あたりまえの一日であろう。しかし、他のどの一日とも違う、この一日である。そこにふくまれる活動も、配慮も、具体的には他のどの日とも異なる。共通なことは、存分に遊んだこと、この一日の中で成長の体験をしていることである。

Mは、他人と存在感と共有し、閉じた世界が開かれる体験を、この日にしたのだと思う。

秋晴れの園外には、子どもにとって魅力のあるものはいくらかもある。外と内との間を揺れ動いている子どもを魅きつけるのは、子ども同士のことを別とすれば、保育者と出会う結びつきか、または、保育者が活力をもってつくり上げている活動かのいずれかであろう。前者が困難な子どもの場合には、後者の重要さが増す。このことは、この一日の出発点における問題点であった。

この子どもは、日頃から、物を並べ、閉じた秩序の世界をつくり出して活動することができる。これを開く力となったものは、この日のことから言えば、同じ活動に他の人が参加することと、流出する物質―水―であった。一方には、閉じていると見える子どもの世界を尊重することを出発点とし、他方には、形のない物質の力を導入することの重要さをあらためて考えさせられる。

この日、子どもが、衣服を脱ぎすてるほどに、自分の活動に力をいれることができたときに、その活動を他人と共存することができた。水を運んで差し出す大人と、

それを受けとる子どもと、存在感を共有する瞬間が生れた。また、そこで同じ活動をしている他の子どもたちと、直接の対話はなくとも、共存感があったに違いない。

この一日の保育は、これに先立つ日日の保育と、この後に続く日日とに支えられてある。閉じた世界が開かれるのは、積み重ねられる日日の中で、徐々になされてゆく。いま、この一日に、私が気付かされたことは、そのひとこまにすぎない。けれども、他の一日と同様に、重要な一日であることに間違いはない。

\* Mは、愛育養護学校幼稚園の子どもである。

